

## 東アジア学生ワークショップ参加報告書

京都大学文研究科修士2年 谷雪妮

この度、アジア研究教育ユニットの派遣で、5年の歴史もある東アジアジュニアワークショップに参加できた。ソウルにて、フィールドワークを通じて韓国社会や歴史について理解を深め、また英語のワークショップで知的刺激を受けつつ、自らも積極的に発信し、捗る6日間を過ごした。

## フィールドワーク (8月22日～24日)

22日にはソウルの大林(Daerim)という中国朝鮮族の集住地域を訪れた。まずは韓中都市友好交流協会の金容弼氏から、外国人労働者として韓国にやってきた朝鮮族の事情を聴いた。現在、中国東北部から来た朝鮮族の移民は韓国の移民総数の三分の二も占めている。しかし、彼等は韓国社会に馴染むのは難しい一方で、韓国にいる中国人とも親しめないという状況に置かれている。また、「民族」という同胞認識を優先するか、「国籍」を優先するかというアイデンティティーの問題もある。これらの問題の解決に向けて、金容弼氏は自費で朝鮮族移住民の声を代弁する新聞を設け、交流協会を設置し、朝鮮族移住民をサポートしている。朝鮮族出身でもない金氏は、自らのプロジェクトを韓国社会がこれからさらに移民を受け入れるための実験だとみている。そのほかに、延辺出身の起業家の話も聞くことができた。彼女はレストラン経営の事業が成功し、その後は朝鮮族移民に資金や就労の支援を提供してきた。23日は午前中、ソウル大にてセウォル号事故の深層についてのレクチャーを聞いた。韓国は高度成長を望むあまりに、リスク管理があやふやにされていることが指摘された。また、韓国において、「権威」(authority)に対する信頼(Trust)の低下もリスク管理の責任者の「不在」につながることに興味深かった。午後は韓国の戦争記念館を訪れ、「戦争」をいかに「正」の記憶として描かれたのかを知った。続いて、梨泰院にてムスリムのモスクとキリスト教会、仏教のお寺が近くに共存することから韓国の多文化共生の事情を勉強した。24日は、主にソウル市の中心地にあるシティホール、古跡、博物館を巡っていた。

## ワークショップ (8月25日～26日)

今回のワークショップは、情報社会、多文化主義、社会認識と平等、家族、若者文化、社会運動という6つのセッションに分かれた。三大学の学生代表は、それぞれの実体験と感心に基づいて、社会学の手法を用いて、社会現象の深層を分析した。社会学専攻ではない私はこれを機会に社会学の知見をたくさん得られた。自らの発表においては、中国現在キリスト教信仰の勃興の原因を分析し、また東アジアの近代国家形成過程の中で、韓国と中国においてキリスト教が果たした役割の差異に注目した。韓国では植民地時代において、教会は自民族の言語で話し、お祈りするほぼ唯一の場所としてナショナリティ形成に有利だった。三・一独立運動においても多くの運動家がクリスチャンだった。それに対して、中国では、キリスト教がとくに学生や運動家の間に不人気だった。キリスト教信仰を帝国主義及び国際資本主義の侵略の手先や、社会科学に反する「迷信」と見なす意見が流通していた。ナショナリティ形成には「負」なものが見なされた。それにもかかわらず、現在中国のクリスチャン人口が増加しているのは、改革開放以降の「信仰の真空化」と考えられる。ワークショップ全体を通じて、いかに個別の社会現象及び個人経験を社会の全体構造と結びつけるかは社会学の要であるということを学んだ。また、経済的な「資本」の要素は常に心がける必要があると感じた。

今回の韓国派遣を振り返って、たくさんの知見を得られたほか、純粹でまっすぐな人たちとの出会いは私にとって思いがけない贈り物であった。マイノリティーの声を社会に訴えるために半生を捧げた者、ベトナム戦争で国が犯した罪と傷を反省させようとする社会団体、セウォル号事故の後の社会の不感心に憤る青年…今回の貴重な経験を自らのアジア研究に活かしていきたい所存である。